

特別支援学校高等部において不適応行動が長期間継続している精神科に通う生徒への 役割交換書簡法・ロールレタリングを活用した新たな支援法の探究

21CP102 西岡範朗（指導教員：村山 正治教授）

I. 序論

特別支援学校高等部学習指導要領（文部科学省，2018）では、「自立活動での支援において「心理的な安定」について規定されている。

役割交換書簡法・ロールレタリング（以下 RRLW と表記）は、学校現場で広く活用されているが、過去 10 年に発表された論文では、特別支援学校での生徒の支援に RRLW を活用した先行事例がない。更に、特別支援教育に携わる教師に行われた調査研究も確認できていない。

II. 本論

(1) 研究 1 RRLW の視点による自己対話を促す新たな「ひとりごとシート」の実践

研究 1 では、「ひとりごとシート」と命名したシートに高等部 2 年生の生徒 A が取り組み、プライベートな空間として機能させることで、自己との対話を通じて学校生活に適応し始めた。成果としては、RRLW の導入に際し、例え白紙であっても、そこにはまだ表現されていない「見えない言葉」がかかれていることを忘れてはならないことを明確にした。

(2) 研究 2 新たな支援方針に基づく「担任による関わらない関わり方」の実践

研究 2 では、研究 1 の生徒 A の RRLW による支援と並行して、「非指示的、非指導的な関わりに終始する」等の新たな 6 つの支援方針に基づいて、支援初期に求められる支援者の態度を明らかにした。成果としては、一貫して指示的、指導的な刺激を排除し、生徒の変化に寄り添うことで肯定的な変化につながることを例示したことである。

(3) 研究 3 RRLW による教師の変化と RRLW の特別支援学校での有用性の例証

筆者は X 年に RRLW 体験研修会に参加し、役割交換をして返信を書くことが難しいことを知った。その後、書記に抵抗があり、日記を書けない精神保健福祉手帳を所持している生徒 B を支援した。

研究 3 では、教師が RRLW の体験を振り返ることで、「書けないという気持ちに寄り添う態度を保持し続けること」ができるように変化し、これが支援者の態度として重要であることが明らかとなった。

III. 終論

本論では、「ひとりごとシート」と「担任による関わらない関わり方」の併用による新たな支援手法を明示した。更に特別支援学校での RRLW の活用は、教師と生徒の関係性の構築に有益な一法であり、精神科に通う生徒への支援において困難な立場で支援にあたる教師にとって貴重な技法になり得ることを提起した。

令和6年2月27日

東亜大学大学院 総合学術研究科

研究科長 金田 晋 殿

臨床心理学専攻 論文審査委員会

主査 村山 正治

博士論文（甲）審査報告書

博士論文（甲）の審査を実施しましたので、下記の通りご報告申し上げます。

記

- 1 論文提出者 西岡 範朗
- 2 論文題目 特別支援学校高等部において不適応行動が長期間継続している精神科に通う生徒への役割交換書簡法・ロールレタリングを活用した新たな支援法の探求
- 3 論文審査委員 主査 東亜大学大学院 教授 村山 正治
副査 東亜大学大学院 教授 桑野 浩明
副査 東亜大学大学院 教授 桑野 裕子

4 論文の内容

序論

- ① 西岡が勤務している総合支援学校の教育現場での様々な教育的工夫が書かれている。
- ② 行動レベルでは、様々な学校適応上の工夫が必要な事例である。
- ③ 病院との連携が必要な事例であり、コミュニケーションや信頼関係形成に、教員の生徒理解が問われる事例である。
- ④ 文部科学省は指導要領で教師の工夫、創意を求めているが具体的な支援法は何も指示されていない。
- ⑤ 先行事例の取り組みの文献が全くない現状も調査し、報告している。
- ⑥ 西岡はこの混沌の中から、この問題に RRLW 法や PCA モデルで対応する新しいアプローチを開発することを目的にしている。

本論

研究 1 及び研究 2 は、指導に生徒理解の質が問われる高校生に対して、西岡が新しく開発した二つの方法「ひとりごとシート」法、および「担任による関わらない関わり方」を実践して、著者が指導に悩み、対応を模索した生徒 A を安定と就職に導いた大成功の事例報告である。

生徒 A の特徴

① 高等部の生徒である。②病院との連携が必要である。③家庭との連携も必要である。

回復の状況過程

西岡の貢献

著者は支援方法に悩んだ生徒 A に、2年生から1年間支援した結果、生徒は情緒安定度が増し、授業に出席が改善し、不適応行動が減少した結果、卒業後、福祉施設に就労している。大成功を納めた事例として記述されている。

西岡が開発した二つの支援法が詳述されている。本研究のオリジナルな点である。

① 「ひとりごとシート」法の特徴

A4、1枚のシートに一日2回、生徒に記入させ、生徒に自分だけのこころの空間を与える支援法で、自己対話を促進させる。フォーカシングのクリアリング・スペースに似ている手法である。

② 「担任による関わらない関わり方」の特徴

- (1) 非指示的関わり方を中心にする。
- (2) 叱責、なだめるなどの声かけをしない。
- (3) 校則を厳格に守ることへの注意、指導をし過ぎない。

支援経過の説明

研究2の経過説明を読むと、新しい支援法の効果が初回から4週までが勝負で、生徒と担任との信頼関係が樹立されていく経過が詳述されている。

研究3は担任している生徒Bへの日記指導で大変化を起こした事例

生徒Bの特徴として①日記指導に強い抵抗があること、②机や黒板へあたることもあり、時に乱暴な行動があること、③病院との連携が必要な事例であること、が記述されている。

西岡がRRLWワークを自身で体験し、親への手紙を書くことの困難性を深く感じとり、生徒Bの日記提出の困難な事情を理解し共感できる気持ちが動いた。そこで西岡は、①「日記を書かなくてよい」が提出はするように促し、②内容の誤字の修正など一切しないこと、を実行すると、数ヶ月後に生徒Bは「できなかったこと」、「失敗したこと」などを日記に書けるようになり、③併行して、暴力的な行為がなくなり、言語表現が増加し、行動が安定してきた。④結果として卒業し、福祉事業所に就職して活動している。

この変化に対して、西岡は生徒との安全な信頼関係が大きな要因と考察している。

5 成果と評価

(1) 著者が支援困難を感じた特別支援学校生徒に西岡が「ひとりごとシート」法、「担任に

よる関わらない関わり方」の新しい支援法を開発した業績は高く評価出来る。

(2) この領域では成功例の報告がない状況中で、1年間の実践事例、6ヶ月の実践事例の2つの成功例を提示している。パイオニア的業績として高く評価出来る実践研究である。

(3) 臨床実践研究であるので、客観的研究への道を拓く結果を出しているものである。今後、本支援法の効果測定、フォローアップなど、研究チームを形成するなど共同研究的システムを組むなど、今後の発展が期待できる。

(4) 西岡自身の RRLW の被験者体験から、新しい役割交換書簡法の訓練法を開発した。この点は、今後の RRLW の教育研修に役立つとして、RRLW 学会からも高く評価されている。

(5) 9年にわたる大学院での臨床心理研究と特別支援学校の現職教職員を両立させ、教員と心理臨床の両専門性と人間性を統合する生き方は、今後のリスキリング教育のモデルとなる社会的意義の大きい研究である。

6 公聴会の結果

本論文の公聴会は、令和6年2月6日、15時25分～16時25分(60分間)2607A教室で実施され、臨床心理学専攻の全職員、博士前期・後期課程在籍者(30名)が参加した公開方式で行われた。

村山の司会で審査委員から2名の副査と、専攻委員から貴重なコメントと質問が行われた。これらのコメントや質問に対して、論文提出者は丁寧に応答し、適切かつ十分な説明が行われた。

コメント・質問のポイントを4点に要約する。

- ① 特別支援学校の教員が、臨床心理学の従来の支援方法と異なる新しい方法として提案したことを高く評価する。
- ② ロールレタリングをヒントにした「ひとりごとシート」法という新しい技法を開拓し、その効果や事例を提示した。
- ③ 西岡自身がロールレタリング研修の被験者になり、その体験を論文化して、ロールレタリングを学校現場に展開、新しい方向を提示した。
- ④ 質問から触発された西岡の応答から、この研究を実践化する過程で、教頭からの理解が大きかったことが明示された。

以上から、本委員会は本論文が博士(臨床心理学)を授与するに値するものと認めます。